

2012年ロンドン大会におけるカルチュラル・オリンピック アード及びその継承事例について ～ロイヤル・シェイクスピア・カンパニー～

国立劇場制作部公演計画課 宮崎信子

はじめに

ロイヤル・シェイクスピア・カンパニー（以下、「RSC」）はシェイクスピア作品を中心として公演を行い、本拠地であるストラットフォード＝アポン＝エイボンのほかに、ロンドン及び英国各地での上演、また世界ツアー公演を行うなど世界的にも活躍する英国を代表する劇団のひとつである。2012年ロンドンオリンピック・パラリンピック競技大会において、過去最大規模で行われ、成功をおさめたカルチュラル・オリンピックの実践例及びその継承事例のひとつとして、RSCの活動について調査報告を行う。

1. 世界シェイクスピア・フェスティバル

RSCは、2012年ロンドン大会におけるカルチュラル・オリンピックのナショナル・プロジェクトの一つである「世界シェイクスピア・フェスティバル」（以下、「WSF」。写真1）を開催している。このフェスティバルは、『シェイクスピアにより世界がつながる』を主テーマとして掲げ、2012年4月から11月にかけて実施された。WSFは、2012年6月から9月まで英国全土で行われたカルチュラル・オリンピックの祭典「ロンドンフェスティバル2012」のプログラムの一部でもある。69の舞台作品、263のアマチュア劇団等による公演のほか、展覧会や国際会議を含む多岐にわたる内容で、

約180万人がWSFに参加したとRSCは報告している。

これほど大規模なフェスティバルを実施することは、RSCにとってもかつて経験のないことであったため、およそ2年をかけて綿密に企画を練り上げていく必要があった。舞台作品の中心となるのは、WSFのプロデューサーであるRSC自身による公演である。RSCでは通常、上演の3年前にはシーズンプログラムの約50%の企画がほぼ確定するため、WSFの全体のプログラムを計画する際、RSCの2012年に上演する作品の大部分が決まっている状況であった。そこでRSCは、フェスティバルをよりインパクトの強いものにし、シェイクスピア作品の多様性や豊かさを明示するために、普段は芸術面及び商業面での競争相手である劇場や組織との連携を行っている。

ロンドンにあるグローブ座が制作した『グローブto グローブ』という企画はその一例である。世界各国から招へいされた劇団が、37ヵ国語で、シェイクスピアの37の戯曲の上演を行った。また、その他にも、エジンバラ国際フェスティバルでのロシア



[写真1] WSFのプログラムを記載した冊子

の劇団やポーランドの劇団、ロンドン国際演劇祭でのイラクの劇団やチュニジアの劇団によるシェイクスピア作品の上演を、WSFの一部として組み込んでいる。こうした企画は、「英国を代表する劇作家シェイクスピアを、英国の劇団が英語で上演する」のではなく、「世界を代表する劇作家シェイクスピアを、世界中の劇団が世界各国語で上演する」ことに重きをおき、『シェイクスピアにより世界がつながる』というWSFの主テーマを、「国境をこえてつながる」という方法により明確に具現化させてみせている。

RSCはフェスティバルにおいて、演劇以外の分野との連携も行っている。例えば、大英博物館は2012年7月から11月まで、シェイクスピア関連の企画展示を実施している。その際、RSCと共同で広報活動やグッズ等の商品開発も行っている。大英博物館の年間の来館者数は、RSCの年間の来場者数の7倍の数値があるため、グッズ販売も単なる収益増という営業面での利点があるだけでなく、WSF自体の周知・広報に大きく寄与することとなった。

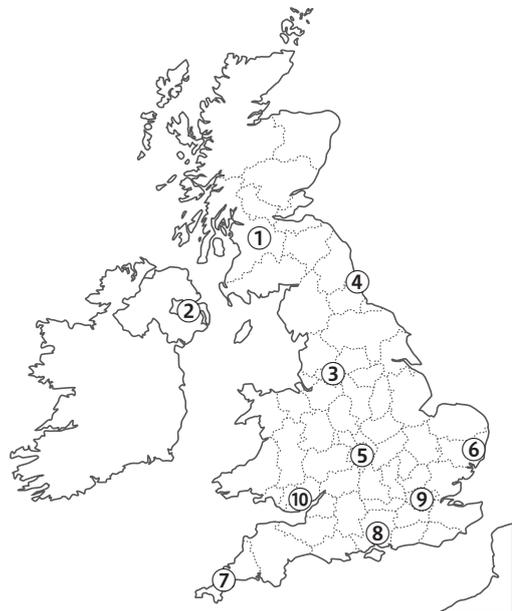
WSFを企画する上でRSCにとって困難だった点として、これだけ多分野にわたる企画の全てをまとめていくための時間的な問題を一番に挙げている。また、フェスティバルのロゴやスポンサーに関わる国際オリンピック委員会やロンドンオリンピック組織委員会への申請・調整をRSCが全て行ったため、それらも大変な労力を費やした点として挙げている。

2. RSCオープン・ステージ事業

2012年ロンドン大会では、スポーツにおけるレガシーづくりや参加を促す機運が高まったが、スポーツと同様に、文化のレガシーづくりや参加を促そうとRSCが取り組んだのが「RSCオープン・ステージ事業」である。これは、英国全土にいるアマチュアの人々の芝居の作り手たちの活動に光を当て、RSCがこれまで培ってきた芝居づくりのスキルやノウハウを彼らと共有しようという試みである。RSCが英国全土のアマチュアの人々と直接接するのは時間的・地理的に困難なため、英国各地域で拠点となる劇場及び演劇の教育機関(表1)を決めてパートナーシップを組み、RSCがそのパー

トナー劇場及び機関のスタッフと連携し、オープン・ステージのワークショップ等を実施している。アマチュアの人々はそこで芝居づくりのスキルアップをする機会を得て、メンタリングなども行われた。また、「RSCオープン・ステージ」の冠を付して自らの公演を行った。上演は、城や浜辺、森、町のスーパーマーケット等、至るところで実施され、RSCの発表では263のアマチュアグループがオープン・ステージに登録し、6～90才までの約7,200人がこの事業に参加したとのこ

[表1] 2011-2012 RSCオープン・ステージ事業
パートナーシップ劇場及び関連機関



- ① National Theatre of Scotland & Royal Scottish Academy of Music and Drama
(現: Royal Conservatoire of Scotland)
- ② The Lyric Theatre, Belfast & Queen's University, Belfast
- ③ Contact Theatre, Manchester & Manchester Metropolitan University
- ④ The Sage, Gateshead & Northumbria University
- ⑤ Royal Shakespeare Company, Stratford-upon-Avon & Birmingham School of Acting
- ⑥ New Wolsey, Ipswich & Rose Bruford College
- ⑦ Hall for Cornwall, Truro & Dartington College
- ⑧ The Nuffield Theatre, Southampton & Rose Bruford College
- ⑨ Questors, London & Rose Bruford College
- ⑩ Sherman Cymru, Cardiff & Royal Welsh College of Music and Drama

とである。

オープン・ステージは、アマチュアの人々のスキル向上という目的のほかに、鑑賞者育成の役割も担っている。英国では人々の初めての観劇体験がアマチュア劇団の出しものであることが多いため、彼らの作品のクオリティが高くなることで、鑑賞者の満足度が高まり演劇に関心をもち、その結果、RSCの観客へと将来つながっていくと考えるからである。

このオープン・ステージ事業は、2012年を機に始められ、好評を博したため、カルチュラル・オリンピックのレガシーとしてRSCは現在も継続して事業展開している。シェイクスピアがエリートの演劇人や限られた愛好家だけのものでは決してなく、全ての人間に開かれたあらゆる人間のためのものであり、それは同時に、RSCも全ての人々に開かれた劇団・劇場であるということはこのオープン・ステージ事業によって示してみせた。また、WSFの主テーマに対し、「アマチュアの世界とプロの世界がつながる」という視点からのアプローチにもなっている。

3. フェスティバルにおけるRSC教育部門の取組

WSFにおけるRSCの教育部門の取組は大きく三つある。

一つ目は、「誰が、いかなる理由で、どのようにシェイクスピアを学んでいるか」という調査を世界中で行ったことである。「全世界の約50%の就学児童青少年が何らかのかたちでシェイクスピアを学んでいる」というその調査結果に、RSC自身が大変驚き、自分たちの事業の必要性を再認識し、事業について改めて考える契機となった。

二つ目は、WSFにおいて若者向けの公演を行ったことである。その理由としては、小さい時から舞台に触れてもらうことで若い観客を育てたいためである。その一例として、『I, Cinna』という8～13才の若者向けの公演を行った。これは『ジュリアス・シーザー』に着想を得て制作された作品で、この時の舞台をオンラインで放映するという初めての試みを行い、英国内の学校は無料で視聴可能にした。

三つ目は、教師に向けて行った事業で、ロンドンにあるテート・モダン、ナショナル・シアター、大英博物館と共同で教師用の3日間の国際会議を開催している。3日間で約400人の教師が世界各国から参加した。そこでの議題は「いかに学校内での文化教育の水準を上げていくか」というものだった。教師向けの取組を行う理由としては、「教師は児童青少年にとって文化芸術を守る門番のようなもの」であり、教師自身の意識を高めることが非常に重要だと考えるためである。

教育部門のこうした取組は「シェイクスピアと若者の世界をつなげる」という観点により、WSFの主テーマに沿ったものとなっている。また、一つ目の調査結果、二つ目のオンラインによる学校への放映、三つ目の国際会議の際に構築された教師間のネットワークをカルチュラル・オリンピックのレガシーとして、2012年ロンドン大会以降も教育部門の事業展開に役立てている。

4. RSCにおけるカルチュラル・オリンピックのレガシー

オープン・ステージ事業と教育部門における2012年のレガシーについてはすでに記述したとおりであるが、2016年の事業展開についてここでは触れておく。2016年はシェイクスピア没後400年にあたり、それを記念した事業が英国各地で予定されている。RSCでは「ドリーム2016」と称し、『夏の夜の夢』の英国ツアー公演を行う。そこで、オープン・ステージ事業のアマチュア劇団の役者が職人の役として出演し、RSCのプロの役者と競演することが決まっている。

各地域の公演には、教育部門による学校向けのワークショップが連動して企画され、いくつかの学校の生徒たちはRSCの各地域での公演に参加する予定である。教育部門のこの参加型事業は、2006年から開始した「ラーニング・パフォーマンス・ネットワーク」という事業で、その教育部門事業と2012年のオープン・ステージ事業が2016年に結びつき、「ドリーム2016」が展開していくかたちになっている。

また、学校へのオンラインによる放映も継続展開さ

れているが、放映用映像のタイトル等を大学で映像製作や映像デザインを学んでいる18～20才の学生が担当している。彼らとこの関係は、2012年ロンドン大会の際に関わったスポンサー企業が見つけないものである。大学生が企画に参加することで、「青少年による青少年のための作品」という意味合いが強くなっている。

おわりに

以上、RSCにおける2012年ロンドン大会カルチュラル・オリンピアードの実践例及びその継承事例をみてきた。RSCの調査を通して強く感じたことは、以下の3点である。

- ①発信力=世界におけるシェイクスピアの認知度及びRSC自身のブランド力を生かして、フェスティバルを世界へ発信する強い力をもっている
- ②推進力=演劇分野、また演劇以外の分野との連携を広く行うことで、フェスティバルをより大きな規模で推進していく力を備えている
- ③展開力=オープン・ステージ事業及び教育部門事業により、参加型事業を英国国内の各地域へ広く展開していく力に優れている

上述のとおり、世界への発信と国内地域へのアウトリーチ活動を同時に成立させている点、また、カルチュラル・オリンピアードのレガシーがいずれもアウトリーチ活動と強く結びついている点は、2020年東京大会における文化プログラムを、文化・芸術を国内外問わずあらゆる人々が享受出来る機会としていく上で多くの示唆に富んでいる。また、RSCが2012年を契機に始めた事業と、2012年以前からの事業が融合し、レガシーとして現在も展開している一連の流れは、日本においても文化プログラムを一過性のものではなく、2020年以降も継続していくことのできる取組とするために大変参考になる事例である。

最後に補足として、2012年WSFに際し、今回調査を行ったRSCの広報部・営業部・教育部ではそれぞれ1名ずつスタッフの増員を行っており、事業規模に見合った人員を確保し、事業体制を整えることの必要性も感じた。



団体概要 ロイヤル・シェイクスピア・カンパニー



- 名称 ————— Royal Shakespeare Company
- 所在地 ————— Waterside, Stratford-upon-Avon, Warwickshire CV37, 6BB
- 設立年 ————— 1875年 前身であるシェイクスピア記念劇場設立(1879年に開場)1961年現在の名称となる
- 客席数 ————— ロイヤル・シェイクスピア・シアター1,040席 スワン・シアター450席
- URL ————— <https://www.rsc.org.uk/>